

2023年 アーモンドの会発題

2023年9月23日

I. M

教会に通うまで、キリスト教と無縁でしたが、教会に通うようになって、救われたと思うことが何度もありました。そろそろ洗礼を受け、キリスト教徒としてやっていこうという覚悟を決め、決意し、昨年イースターに洗礼を受けました。イエスキリストは救い主です。私が生まれたのが昭和51年3月5日。栃木県小山市の病院で生まれた。下手をすれば死産だったかもしれないと聞かされた。

幼稚園でいじめられ、小学校、中学校、高校ともいじめられた。

バイト先でもおまえは窓際になると言われ、その悔しさを晴らす心のよりどころといえる両親もたいしてあてにならなかった。

見下されることが多く心を二つに引きさくような複雑な思いはその後ずっと私の胸の深奥にトラウマとして残ってしまった。高校になると相変わらずバカにされていたが野球部に入りきつい練習と奥歯がぐらつくほどの殴打を受け、泣き虫だった私も鍛えられた。

部活以外では私自身、本が好きで当時人気のあった村上龍や浅田次郎、花村萬月などは全作品読んでいた。

漫画の「サンクチュアリ」にもハマった。仕事をするようになっても影響が強く反抗的な態度で恐れられていた。物事を斜めに見る癖がついてしまい、仕事が長続きせず転々として履歴書を書くのが辛かった。親に早く働けと怒られ、求人情報を読まされるのにうんざりした。

高校の同級生に白痴と呼ばれ、英語の勉強や資格を取ろうともせず諦めていた。

大学に行くという考えもなく、中学3年時の偏差値が37で普通運転免許に何回も落ち、フォークリフトもなかなか受からなかったということもあり、(トホホ)しだいに投げやりになり、家に引きこもり、(将来への不安と親からのいつになったら働くんかという圧に苦しみ)当然のように病んでいき、殺人をして逃げている妄想や盗聴されている妄想、見晴られている妄想に苦しめられたり、マンガや小説のセリフが聞こえてくる幻聴や死ねバカという攻撃的な幻聴で自殺も考えた(24歳)。仕事を振り返ると、佐川急便の仕分けの仕事は体力のいる作業で1日目はめちゃくちゃ辛かった。

しかし1週間で体が慣れ野球部で鍛えられたのが役に立ったと思う。頭を使うことはさほどなく流れ作業でベルトコンベヤに荷物を流していた。楽ではあったが半年くらいから、この仕事をずっとやっていくのはどうなのかと疑問を持った。それにしても次の仕事を見つける前に辞めたのは雑だったと今になって思う。喋りたい欲求が強く営業や販売の仕事を選択した。アロマセラピーの資格を取る学校の紹介しますという営業の仕事についていたが、説得する技術がなく契約が取れずに会社のお荷物となってしまう居心地が悪くなり、池袋まで電車に乗って行っていたが、途中で降りどこか遠くに行きたいと途方にくれた。

仕事の能力不足で、男は仕事、稼がなきゃという思想で役に立たないとダメと考えていたので、絶望感で死にたくなかった。これから仕事が出来るとか思えなかった。家に引きこもり、何をすれば良いのかわからず苦しみながら母親に仕事をしないと宣言し、当然のように怒り、苦しい日々が、、、妄想に戻るとさらに母親に殺されてしまうんじゃないかという被害妄想や、お笑い芸人になりビートたけし、ダウンタウンを打ちのめし芸能界の帝王になったという誇大妄想を抱いたり、ほとんど話をしたことがない高校の同級生の美女と結婚するんだという妄想で家を出ていけと言われ、母親を呆れさせた。

まだあり、敵に攻め込まれ家がなくなったという妄想を抱いた私は家はあるかと母親に聞き、爆笑された。(妄想と現実の区別つかなかった) 常にハラハラしており頭がわれるんじゃないかという恐怖や心臓がとまるんじゃないかという不安に支配されていた。食事をしてても味覚がなくなり砂のような味で食べれず残していた。眠れず食べられずガリガリに痩せていた。他にも親に暴力をふるったり、部屋の電球を割ったりした。風呂に入る時も心臓がバクバクして怖くなり湯船につからずに出て、母親に殺そうとしているだろと詰め寄り、

勢いで外に出て歩きまわり幸手、春日部、岩槻まで行き疲れて休み、あてがないので来た道に戻り帰宅した。両親に連れられて近くのクリニックに行ったが待っている間に拷問されるんじゃないか、殺されるんじゃないかと怖くなり、急いで裸足のまま逃げ出した。数日後、夜にパトカーが来て暴れないか、覚醒剤はやってないかとか数人の警官がチエックしてる様子で、大丈夫そうだと判断したあと、久喜市の精神科に運ばれた(近くにあってよかった。)

医者との問診で妄想を現実のように話していたら、冷静さをかいた母が話に割り込み話出したので黙ったら、医者は「お母さんは黙っていて」と言った。医者は統合失調症と判断したらしく気がついたら個室のベットの上だった。三日間寝ていたらしく、医者は疲れていたんだよと言った。予想以上に体調がよくなり、食事を楽しめた。味覚も回復していた。幻覚や妄想がきれいに消えていた。仕切りのない六人部屋に移された。蕨市から来てると聞きそんなにあちこちから来てるのかと思った。盗みを働き部屋を移動させられる若い子や気が弱くうんちを漏らしてしまう子もいた。

大広間に出てテレビを見ていたが、人と話すのは面倒だと思ひ人を避けた。たいていお金がなかったこともあり、禁煙した。回復が早く退院許可が出たのだが両親が怖がってまだ入院し続けることになった。しかし、薬の副作用でじっとしてられずに移動していた。薬が強く何かを押さえつけられてる感じだった。両親が面会に来てもほとんど話せず苦しんでいた。父親の退院したら公園に行こうと言う言葉に優しさを感じた。六年しか働いていないのに統合失調症になり、退院してから社会でやっていけるか不安だった。

私もしばらくの間、全身拘束をされていてオムツやら尿道のところに管が入っているやらという始末、さらには薬が合わず蕁麻疹みたいに赤くなって痒かった。食欲が出てきた時に食事の時間に女性からの質問攻めにあい、食事が喉を通らなくなりおかゆにしてもらい人を避け、部屋で食べた。点滴でのトイレへ歩くのもしんどかった。車椅子の人やアルコール依存症の人、境界性人格障害の人、自殺未遂で運ばれて来た人、乖離を起こして子供になってしまう人、ごめんねごめんねと繰り返している人など様々な人たちに囲まれてむしろ安心していられた。

恐らくみんな苦しんでいるんだという思いが癒しとなり救われたのだと思う。退院してからがまた苦しむのだろうという予感がした。3か月ほどで退院になり、退院の時も家に帰るだけなら着替えなくていいだろうと言ったら駄目だと言われ本当に家に帰るだけなのかを疑った。しぶしぶ着替えて帰宅したら自分の部屋が様変わりしていて驚いた。

しばらくの間食べて寝るだけを繰り返した。母が寝てるだけじゃないかこれからどうするんだと怒り、死ぬか、お前を殺して私も死ぬと言った。鈍くなっているお陰でたいしてダメージを受けなかった。

母親の立場なら一人息子がこんなありさまでは悔し涙も出ない情けなさだったろう。回復してきて起きてられるようになり、散歩をするようになった。薬の影響で間食がやめれず午前十時と午後三時にビスケットをめいっぱい食べ三十キロ増えてしまった。退院してから三年くらいして病気をかくして派遣で働き出した。きついなと思った。父はそのうちいいことあるよと言った。入院する前に働いていたマッサージチエアの営業の仕事仲間の先輩に電話で病気になったと伝えたら宗教に入りなと助言してくれた。

佐川急便の仕分けをやっていたころの年上の知り合いに創価学会の勧誘をうけた。その人は母親の病気で悩み、医者に見捨てられた時に支えてくれたのが創価学会の友人で入信したと言っていた。それよりも仕事の悩みがデカく、診察の時に仕事の能力不足で、辛いと言ったら、主治医が働かなくてもいいじゃないと発言した。障害年金のことを知らなかったもので、無茶言ってるなと思った。デイケアがあることを知り、見学して参加することにした。みんな障害を持ち、傷ついた人たちで暖かかった。カラオケにパソコン、楽器を使っ
ての演奏などのプログラムに癒され、かなりのリハビリになった。

ガーデニングや近くの公園までおしゃべりしながらの散歩、美人ばかりのスタッフが優しくドンドン回復していった。週に三日でスタートしたが、毎日通う程の傾倒ぶりだった。入院中は人を避け、プログラムをバカにして一切参加しなかったがデイケアでやってみると楽しめた。楽しくて、楽しくて今までの分を取り返してる気持ちでいた。臨床心理士の主催する自分研究会に参加して、所謂認知行動療法を学んだのも大きかった。鬱の人がはまって帰宅したらそればかりやってしまうほどでみるみるうちに元気になっていった。

他にもSST(ソーシャルスキルトレーニング)というロールプレイングに参加し、基本的な挨拶や会話、礼儀作法を学んだ。機能不全家族の人が多いのがデイケアの特徴と思った。薬の影響で不安や恐怖を感じずハイテンションで行動していた。なかでもクロフェクトンが効いていたと思った。他人からしたらウザかったらしく、うるさい、躁病じゃないの、誇大妄想だなどか言われた。退院してから十年以上経っていた。デイケアも4年経ち、(36歳)おとなしい人ばかりで傲慢になり、問題ばかり起こし、担当のスタッフと面接をし、やめることにし、(だいぶ人を傷つけた)作業所に通おうと思い、久喜の就労支援の人の案内で、浦和まで行き見学したり、知能検査を受けた。

結果は境界知能で
ギリギリ働けるレベル
とのことで、例えばニ
トリでダンボールをか
たすという単純な作業
が向いていると言っ
ていた。仕事が出来ず
に苦しんでいたこと
への疑問が解けた瞬
間だった。



しかし、作業所に通うのを断り、なぜならお昼も交通費も自腹で試用期間は無給ということで、それよりも知能をどうやったら高められるかを調べた。なかでも、語学と楽器演奏、ボイストレーニング、歩くことは出来そうな気がした。さらに基礎学力が足りていないので一般常識の勉強して世界史、日本史の勉強をしておいた。また、栄養素のことも学び、まごわやさしい(豆、ごま、ワカメ、野菜、魚、椎茸,芋)や地中海式(心血管疾患や糖尿病、癌等の予防になる)の食事にし、歩いて痩せた。ピーク時の90キロ台から55キロになり、太っている時辛かった腕立て伏せもやりやすくなった。

しかし傲慢さのつけで風当たりが強く、資格とるわけじゃないのに何したいんだらうねとか、あの子大丈夫なのとあざわれ、一回りも下の子に舐められ、年下なのにとあざわれ、私は相当痛い奴なんだなと自覚した。精神的に幼く未熟な自分を変えたいと思った。多い時で15錠くらい飲んでた薬が1日2錠になった。寛解したといえるだろう。)

なかなか働こうとしない私に年金泥棒、寄生虫と知人たちは言った。

何してんのとか、お前は成功者の話をしてればいいんだよとか、軽蔑とあざけりのなか、本を乱読した。今までの読書を振り返ると、きちんと読めてなかったな、読解力を身につけてなかったなと恥じた。知能検査で最も低かった空間把握を伸ばしたいと思い、楽譜を読む訓練をした。いろいろと調べてみると時間と空間、距離との関係をきちんと整理して把握する能力は、生後数年間で脳内に整備されるとのこと、そうした発達を幼少期のトラウマによって妨げられたのだろうと思う。

8050問題が気になり主イエスに導かれ、教会の門を叩いた。危機感がありひどくあせっていた。さらに人間関係でも悩んでいて、新しいコミュニティを探した。プロテスタントに興味を惹かれた。すぐに検索して、久喜復活教会のホームページにたどり着き、勢いそのまま、電話をかけた。山野裕子牧師が出て、統合失調症であること、仕事をしていないこと、親が70代で、8050問題で悩んでいることを伝えた。



快く、「日曜日には礼拝にいらっしゃい」と言っていた。実際に日曜日に参加してみると、皆温かく親切で、讃美歌の開くページを教えてくれたり、聖書の開くページを教えてくれたりした。礼拝後の茶話会も楽しく、初日としては好調と言えた。さらに水曜日の夜の聖書を読み祈る会や木曜日の月一回の聖書を学ぶ会にも参加した。目新しく好奇心をかきたてられ、充実した生活を送れるようになった。また父も母も日曜日に出かけるのを喜んでいるようだった。引きこもりの息子を持つ親なら、少し良い方向へ進んだくらいに思ったのかもしれない。

2020年、薬をやめた人がいるという情報に影響され、薬を飲むのをやめてしまった。途端に妄想、幻聴が現れ苦しくなった。3週間入院し、また教会に通い出した。コロナの頃で、小人数で礼拝が行われ、リラックスできた。友人の小林君も教会に来るようになり、車で送り迎えしてもらい、通うのがグッと楽になった。今まで心配をかけてきた両親を今度は支え守れるようになれるよう、また教会に役立つ人間を目指し、さらに社会に貢献できるようになっていこうと考えている。そう思えるようになったのも、教会に通ったおかげであり、常に前進し、成長していきたいと考えている。

発症してから20年たつ。洗礼を受け、キリスト教徒として生きていくことで、どんな逆境でも、乗り越えていけると固く信じて疑わない。教会での奉仕活動として大掃除をしたり、献金当番や調理実習をし、教会での役割が良い刺激になっている。また教会のひとにラーメンをおごってもらったり、洋服をもらったり入院中にハガキをもらったのもうれしかった。感謝である。人数も多くはなくリラックスしてもらえる教会だ。クリスチャンとなり、主を愛し、隣人も愛し、敵も愛す方針に変わった。すべては決められていたのかもしれないと感じている。